

岡山大学「津山アイディアソン」実施報告書



2019年3月

岡山大学 青尾 謙

1. 要旨

2019年1月20日に、岡山大学グローバル・ディスカバリー・プログラムの学生を中心とする岡山大学の教員・学生が津山市を訪問し、「津山アイデアソン¹⁾」²⁾を開催した。

学生たちは津山市城東地域で洋学資料館および梶村邸を見学、その後徒歩で中心部を通り城西地域に移動の上、地域の方々や津山市内の高校生による地域の歴史や現状、取組みについて学んだ上で3班（お寺、空き家利用、地域活動）に分かれ更に地域について学び、その後地域の皆様とのディスカッションの中で地域の改善のためのアイデアを創出した。

学生たちからは「津山の歴史と文化を感じた」「熱意ある地域の方々や高校生に感銘を受けた」との意見の一方で、「せっかくの歴史ある街並みを活かしていない」「観光客が楽しめる体験や食の提供が必要」「若い人が集まれる環境が必要」等の提案があった。更に、「開発による負の側面や異文化との衝突や摩擦もある。津山の人たちはそれでも観光客や移住者等、外部者に来てほしいのか、あるいは今いる人たちが暮らしたいのか、自身で選択する必要があるのでは」との意見もあった。

2. 実施概要

2-1. 概要

日時	2019年1月20日（日）
参加者	・岡山大学の学生：28名 ³⁾ （うち留学生13名） ・岡山大学の教員：4名 ⁴⁾ ・津山市内の高校生・教員：約25名 ・津山市役所、津山洋学資料館、津山商工会議所、城西地域の皆様
目的	・岡山大学の教員・学生が津山の地域、歴史や文化について学ぶとともに、その理解に基づきアイデアを創出すること
訪問地	・津山市城東地域（津山洋学資料館、梶村邸） ・同 商店街（ソシオー番街、元魚町商店街） ・同 城西地域（作州民芸館、作州絣工芸館、寺町、古民家）

¹⁾ 「アイデアソン (Ideathon)」とは近年欧米圏で使われるようになった用語で、「アイデア」と「マラソン」をかけて「アイデアを出し続けるイベント」の意味。

²⁾ これとは別途、2月16日に岡山大学保健学科の教員・学生による「岡山大学 津山アイデアソン（保健学科）」が開催されているが、本報告書では1月20日実施分について扱う。

³⁾ このうち27名はグローバル・ディスカバリー・プログラム（学部相当）の1-2年生、1名は大学院ヘルスシステム統合科学研究科の博士後期課程1年生

⁴⁾ 大学院ヘルスシステム統合科学研究科 五福教授、出村教授、兵藤教授、青尾

2-2. 当日スケジュール

時刻	内容	備考
08:45	岡大出発	貸切バス
10:30-12:00	津山到着、城東地区訪問 (洋学資料館、梶村邸、商店等予定)	洋学資料館で説明
12:00-12:30	商店街を通り城西地区へ移動	徒歩
12:30-13:00	作州民芸館で昼食	昼食は武田待喜堂の 弁当
13:00-13:30	2階会議室で4校連携地域学習に参加した高校生から地域の現状や課題について報告	
13:30-14:00	地域の状況や課題、取組について報告(城西まちづくり協議会 佐々木事務局長)	
14:00-14:30	津山市(城東・城西地域)の歴史について報告(津山市 乾学芸員)	
14:30-16:30	3グループに別れる(案内者が同道): A. 「お寺」グループ:若僧会メンバーと対話 B. 「空家」グループ:空家の見学と活用について C. 「地域」グループ:作州民芸館での活動について	各グループに引率教員
16:30-17:30	作州民芸館1階でお茶とお菓子 2階会議室でまとめとアイディアの紹介(個人発表)	
17:30-18:30	津山出発 岡山大学にて解散	貸切バス

3. 学生による意見・提案⁵

3-1. 津山の持つ強みや魅力

- 来る前はほとんど知ることのなかった津山の街並みやお寺、蘭学・洋学の伝統、作州絃等から、豊かな歴史や文化を感じることができた。(多数)
- 街全体が魅力。「過去にタイムスリップしたよう」「時間がゆっくり流れるまち」「建物と人と歴史が津山の宝」等の表現も。
- 昭和を感じる商店街も魅力。空き家や空き地が多いのも、新たにビジネスを始めるために活用可能な強みとの意見も。
- 周辺を含めてアウトドア活動等に使える豊かな自然や広いスペースがある。

⁵ 当日の「アイディアシート」および後日提出の課題より青尾が抽出・翻訳(原文は英語)したもの。同じような意見は(多数)としてまとめた。また個人情報の特定を避けるため、一部の情報を加工している。

- 武田待喜堂さんのおこわ弁当や北天まんじゅうが美味しかった。(多数)
- 地元の方々、お坊さんたちの温かいおもてなしや案内が嬉しかった。学生の意見にも真剣に耳を傾けてくれた。(多数)
- 地域の方々が地域の課題に向き合い、子育てサロンや寺子屋等の活動に取り組んでおられる姿に感銘を受けた。(多数)
- 地元の方々の津山に対する誇りや愛を感じた。(多数)
- 地域をよくしていこうとする、意欲ある高校生が印象的だった。外国人相手にもしっかり考えを述べ、自分たちでできることを考えようとしていた。
- レプタイル社のような会社が津山信用金庫と共同で若者支援や起業支援に関わっているのは興味深い。

3-2. 津山の課題

- 交通が不便（岡山からの往復、市内の交通ともに）。(多数)
- 中心部の人通りや観光客が少なく、特に若い人をほとんど見なかった。(多数)「ゴーストタウンのよう」との意見も。
- 商店街を見た限りでは、店に活気やバリエーションが乏しい（売られているものが多く年配の方向け）ように感じた。店や居場所など、若者向きの環境がない。(多数)
- せっかくの古い建物が空き家になり、活用されずにいる。道にゴミが多く、古い建物でも傷んでいる部分が多く見られた。(多数)
- 観光客ができることがなく、時間が過ごせない。多くの建築物が公開しているだけ。(多数)
- 市のどこに何があるか、わかりにくい。日本語以外の表示等が限られている。日本語のわからない人は店で何を売っているかもわからない。(多数) 土地の食べ物を食べられる（とすぐにわかる）場所が少ない。
- 津山の魅力が外の世界に知られていない。(多数)
- 地域の歴史や文化は学芸員等、一部の人しか知らないように感じた。より若い世代に共有されるべき。その説明の方法も全部を聞かないといけないか、あるいは一部のみを選択して知ることができないのか、検討の余地がある。
- 新しいビジネスや企業等が生まれていないように感じた。
- 市中心部にある高等教育機関が少ない。
- 地域の活動に頑張っているのは一部地域のみのように感じた。市の全体に拡大していく必要があるのではないか。こうした活動に行政から十分なサポートがあるのか疑問。
- 現状では海外からの観光客やよそから移住する人を歓迎しようとする姿勢は弱いと感じた。津山への誇りが変化を拒む一因となっているのではないか。
- 新しいアイデアや変化に対して保守的であると感じた。津山の人が地域で活動に取組む際に、外部の意見を取り入れることも有用ではないか。
- 街を歩いていると、地元の車に脅かされることが多かった。本当に観光客やよそ者に来てほしいと思っているのか疑問。
- 津山市は将来どうありたい、という統一されたビジョンが明確にあるのか疑問。行政や地域

の人たちの方向性が一致していないのではないか。(多数)

- 津山市は観光客も移住者も、ではなく、優先したいターゲットを絞るべきように思える。

3-3. 観光について

- 観光客を誘致するのであれば英語や中国語等の表示は必要と考える。(多数)
- インスタグラムやツイッターの活用(多数)。個別の店が SNS を広報に有効に利用している例⁶についても。
- 岡山や関西から直行のバスツアー等を検討すべき。
- 古い町並みや家をカフェやレストラン、地元の食や産品を売る店舗、ホテル・民泊に活用⁷、「歴史の中に泊まろう」キャンペーン。江戸時代や昭和時代等のテーマの場所があったり、店で地元の高校生が売るのが手伝ってもよい。
- 古い建物を修復すべき。古いものと新しいものが混在しないような街並み作りも必要。
- 観光客にとっては「〇〇限定」のような限られた場所ではかできない体験が魅力となる。お寺を使った修行体験や、職人さんを訪問するツアーのようなものも考えられる。
- 歴史を疑似体験(茶道、着物や昔の服装着用、昔遊びや昔の食事等)できるような場所やウォーキングツアーは魅力。写真撮影のできる場所も。外国人観光客のための「寺めぐり」ツアーにも。
- 街全体に「楽しさ」が感じられるといい。せっかくの魅力が活かされないのは残念。
- 作州民芸館で土地の食事を提供し、かつ素材や料理についての説明が聞けるといい。
- 古い家を、昔の生活を再現し、訪問者がそれを体験できる双方向的な博物館(江戸東京博物館やバンコクのサイアム博物館のような)に作りかえる。地元の人も訪問者との交流や、身近な昔の物を提供する等、住民参加型のものとしていく。
- 津山の民間伝承や神話を活かした劇やミュージカル⁸を街中で行う。地元の人も演者や裏方として参加。
- 地域で調べながら質問を解いていくようなミステリー宝探し ⇒ 完了した人には賞品や割引の提供。
- 越後妻有大地の芸術祭のように、街とアートを一体化させたイベントが考えられる。それによって訪問者が津山の伝統を学べるようになる。岡山アートプロジェクト等との連携も。
- 音楽(ジャズ等)を聞きながら夕食を食べられるような街ぐるみのイベント。
- 映画祭や映画産業を津山に導入する⁹。映画フェスティバルや写真コンテスト等も。
- マラソン、自転車レース、音楽、宗教、茶道、ハイキング、現代アート、写真、サバイバルゲーム、コスプレ等のイベント誘致。
- 岡山県内の留学生は多いが、日本の文化に触れる機会は少ない。留学生向けのバスツアーを検討する余地がある。民宿等で滞在することによりお金を落とすことにもなる。学生がお寺

⁶ “rainbow grilled cheese”、“#ロールアイス”、@slope_igusa 等

⁷ 他地域の例として倉敷、矢掛、京都等があげられた。

⁸ インドネシアのバリにおける伝統舞踏や演劇等の例

⁹ カナダ・バンクーバーの例

に滞在して修行したり、球技大会を開催するようなことも。

- テレビや映画の舞台となることで海外から人が来る¹⁰。撮影への協力を行うべき。
- 海外でインスタグラム等の SNS を通じて影響力を持つような有名人を招待し、魅力を発信してもらおう。
- 地元の方々の知識を取り入れた、より魅力的なガイドマップの作成。
- 小手先の試みではなく、外部者等の視点を入れたより根本的な変革が必要との意見も。

3-4. 移住促進について

- 歴史ある町並みと温かい人たちの存在だけでは、若い人は移住できない。その町に新しく、特別なことが起こっており、興味深い内容の仕事が多くあれば、その意欲もわくかと思う。
(多数)
- 若い人が住むためには、そこに多くのかつ多様な仕事があり、キャリアを形成していけることが重要。(多数)
- 若い人が住み、コミュニティを作るためには交通や、店（スーパー、書店、飲食店等）、遊び場等が必要。同じような人と集まれるカフェやコワーキングスペース、公園等も必要。(多数)
- 都会暮らしで疲れた人を津山に迎え、当地での生活のあり方を体験してもらうツアーを開催する。スキルのある人が副業として津山に貢献してくれればよい。
- 若者が住むのであれば副業や、リモートワークとして 2 拠点居住のように津山に住むことが考えられるのではないか。
- 市として若い人の起業支援に力を入れていくことも必要ではないか。そのために空き家や店舗を使い、起業しやすい地域を整備するようなことも検討すべき。
- より多くの人々が津山を訪れるようになり、その人たち相手のビジネスが増えれば移住の誘引となりうる。
- 市内で観光向けの地域と生活のための地域を分けるのも一つの手ではないか。
- 地方創生に関心を持つ大学生をインターンとして集め、作州民芸館の近くで空き家を再生した場所に宿泊させながら、民芸館で地域活動の手伝いや発信をしてもらう。
- 津山が医療の伝統を活かした専門学校を設置し、山陰・山陽地方や関西から学生を誘致すれば若い人が増えるのではないか。高齢者へのケアを研究するセンター等にも。
- (参考まで) 参加した学生 26 名に「人生のどこかの時期で津山に住みたいと思うか」と尋ねたところ、「はい」は 7 名 (25%)、「いいえ」が 21 名 (75%) となった。「ここに十分な仕事があるとは思えない」「引退したら住みたい」「現状では日本語のできない外国人には難しい。津山が変わったら考えたい」「車の運転ができないから難しい」という声も。

3-5. 学生にできること

- 自分の周りの人への紹介や、インスタグラム等 SNS での発信 (多数)
- 英語での発信の手伝い

¹⁰ アニメ「スラムダンク」を見て多くの人々が鎌倉を訪れている例等

- イベント等は津山の人を中心になって行うべきと考えるが、企画等について手伝いはできる。
- 若者の視点から、魅力ある企画作りに助言できる。
- マーケティングを勉強しているので、地元企業で製品について発信等の手伝いができる。
- コンテンツ制作等。

3-6. その他

- 開発により伝統が失われた例は多い。津山の人たちは伝統と便利さの両立を考えた上で、将来を考える必要があるのではないか。
- 津山の人たち自身で、外部の人に来てほしいのか、あるいは今いる人たちで幸せを追求するかを決める必要があるのではないか。(多数)
- 移住促進より、現在住んでいる若い人に地域を知り、愛着を持ってもらうように考えてもよいのではないか。
- 地域をまとめ、引っ張っていくリーダーシップが不在のように感じた。
- 大人が高校生の意見を聞き、尊重する姿勢が弱いように感じた(何も知らないんだから、という態度や、周りから囃し立てるような態度が見られた)。若者が他人と異なる意見を持つのを奨励するようなサポートが学校等でも必要ではないか。
- 若い人が地域の歴史や現状についてあまり知らないと聞いた。高校生がもっと地域に出て、地元の人から話を聞いたり、地域について学ぶ機会があるといいのではないか。
- 地域での活動についても、地元の高校生等が活動に参加したり、企画を相談できるようになるといい。
- 大学生と高校生が一緒になって地域について学んだりする機会がもっとあるとよい。

3-7. アイディアソンの感想

- 津山を訪れて素晴らしい場所だと感じた。
- 楽しかったです。有難うございました。
- 出会えた地域の方々の優しさに心打たれた。入り浸りたいと思った。
- 地域の課題やまちづくりの取組みについて知ったことで、視野が広がった。
- 地域を訪れアイデアを出す機会は初めてだったので、とてもよい経験となった。
- 今日学んだことで、津山の発展のためにどう役立てていけるか考えたい。

4. 参加した高校生からの感想

- 自分たちが津山のよさを知り、外に対してアピールするものを明確にする。
- 若者向けか、高齢者向けか明確にする。
- 作州民芸館を中継・発信する場とする。カフェや観光案内機能。
- 大学で外(東京や大阪)に出たとき、友人を連れてくる。
- 津山人をフレンドリーに。

- 高校生が来たくなるようなかわいいカフェを作る。若者が好きそうなメニューを考える。
- 城西をよく知っている自分たち高校生ボランティアが英語で御朱印めぐりツアー。
- 自分たちが思いつかないような、留学生の人たちからの色々なアイデアを聞いて、よいアイデアがうかんだ。
- 今日はこの地域の問題点や活かせる点を外部の人から聞いてよかった。

5. 考察

5-1. 学生たちの発見

今回参加した学生たちの多くは、今回が津山を訪問するのが初めての機会であり、津山の豊かや歴史や文化に触れての驚きが第一印象として強かった様子であった。「知らなかった」という声も多く、岡山に居住・通学する学生にとって、県北の情報はほとんど入る機会がないことが伺えた。

次いで学生たちの印象に残ったのが、津山洋学資料館や城西地域、商店街等で迎えてくれた方々の親切さと、地域に対する誇りの強さであった。地域で子育てや高齢者支援に取り組む方々や、地域の歴史を説明してくださる若僧会のメンバーの真摯さが強く印象づけられていた。また地域の高校生たちによる報告やディスカッションでの積極的な意見が、学生たちにとっても学びの機会となっていた。

今回のアイデアソンでは①岡山大学の（留学生を含む）学生・教員、②地域の大人たち、③地域の高校生・教員と異なる視点を持つ参加者が、価値観や視点の違いはありつつも、互いの意見に真剣に耳を傾けている姿が印象的であった。その意味では思った以上の成功であり、参加して下さった地域の皆様並びに高校生に御礼を申し上げたい。

意外であったのは、地域で学ぶ中で多くのアイデアが観光分野に集まったことだが、これも地域の歴史・文化を活かそうという発想からの流れであったものと思われる。ただ一部の学生からは京都や倉敷等と比べた際の差別化が必要といった、冷静な意見も見られた。

5-2. 学生たちのアイデア

4. にあるように、多くの学生が感じたのは、観光客が津山市内で「体験」できることの少なさである。特に外国人旅行者がそこでしか得られない経験に価値を見出すようになってきており、津山でも古い建物を開放したり、展示を置いておくだけでなく、来訪者が直接参加できるようなアトラクションの必要性が強調されていた。

また、城東＝中心部商店街＝城西と結ぶラインの簡便な交通整備や、商店街等の空き店舗やスペースを利用した起業支援等の必要性も多く語られた。

5-3. 学生たちの戸惑い？

一方で、学生たちの意見を見ていると、「津山市民は本当に外部の人を必要としているのか」という疑問を感じていたように感じられる。また、高校生や女性に対する大人の男性の態度等から、

「多様性」の受容について懸念を持つ意見も見られた。津山に対する好印象にも関わらず、「津山に住みたい」と思った学生は予想以上に少なかったのも、一部はそういった懸念を反映しているものと見られる。行政や地域の方々が外部の人を受け入れると決断し、そのために何かをしようとするのであれば協力したい、という意見が、学生たちの最大公約数的な気持ちであったように思われる。

5-4. アイディア

そうした合意や意志がコミュニティ内部で取れたとして、参加者の提案を整理すると大まかにいくつかのアイディアに分けられるように思う。以下、そのうちいくつかと整理する。

① 歩行による体験空間とモビリティ

海外からの観光客を含め、津山を訪れる人（以下、来訪者）に楽しんでもらい、お金を使ってもらうためには現状のコンテンツは弱いと言わざるをえない。良いものは多いが、それを伝わる形（言語・フォーマット）で届けることができなければ、それは「知っている人だけが知っている」もので留まってしまう。

それぞれ特色の異なる城東・城西を核として、それを横につなぐ駅前、縦の津山城や聚楽園の間を来訪者が歩いて楽しめる空間を整備し、またコンテンツを用意することは必須となる。また魅力の「伝え手」として地元事業者や若者・高齢者含めたボランティア、あるいは多言語対応したVR（バーチャル・リアリティ）アプリケーション等を活用していくことで、津山の魅力がただ「そこにある」だけでなく、個々の来訪者にとっての「自分のみの経験」として意味を持つものとなる。

更に、それらの空間をつなぐ（バスや限定された箇所では借りられないレンタサイクルに代わる）利便性のあるモビリティ手段についても検討する必要があるだろう。

② 新規・従来事業者の起業支援

現状ではアイディアソン参加者が訪問した城東・城西、あるいは駅前の商店街地域といずれをとっても賑わいがあるとは言えず、魅力ある事業者が増やすことが必要である。その際に従来の事業者が既に提供しているものを含めて、来訪者にとって魅力的な事業として打ち出していくことが大事であろう。また外部から来た人や、地元の若者が試行的なものを含め新しいことをやっていくことも必要である。

後者の場合には、当然ながら店舗の賃貸や資金、従来事業者・組織体との関係が問題となることが多く、それを個々の事業者に任せるのでは解決は困難である。行政や金融機関、あるいは津山商工会議所、連合町内会等の中間的な団体が間にたって調整役を果たしていくことが望ましいと考える。

③ 地域の取組支援と、外部者・若者の視点取り入れ

いずれにせよ地域の活性化は外部からの支援や取組で解決する問題ではなく、地域の事業者やコミュニティの力を活かしていくことが基盤となる。津山市内では城西地域等で高齢化や子育て、

防災等の地域課題に対する取組が進んでいるとともに、地域の拠点（作州民芸館）をもとに事業経営にも乗り出しており、このような「コミュニティ・ビジネス」の動きを更に広げていくことが大切であろう。その上で、今回のような外部者の意見や協力を排除することなく、取り入れていっていくことも有用であると考えている。

5-5. 最後に一担当者としての所感

岡山大学＝旧「美作国」包括連携協定プロジェクトの担当者として、津山に頻繁に出入りするようになって1年近くが経った。その中で津山の持つ魅力と、そこに住む方々の誇りや真摯さに感銘を受けてきた。しかしその一方で、外部者としてそこに口を出すことの意味や、それが住む方々のお気持ちを傷つけることになるのではないかと心配も感じていた。

今回のアイディアソンは、そうした自分の戸惑いを軽々と飛び越えて、外部者としての学生と、高校生を含めた地域の方々との意見をぶつけあう機会となった。その中に互いの食い違いはあったとしても、アイディアソンを実施したことの意義は「価値観や目線の異なる外部者」を迎え入れ、その意見に耳を傾けるというその事自体にあったのではないかと、その様子を見ていて感じた。

岡山県内を含めて、多くの地方で外部者が入ることが、新たな試みを呼び起こすきっかけともなっており、今回の学生たちのアイディアが、地域で新たな取組をしていこうとする方々にとってお役に立つものであることを祈念したい。

最後となるが、今回の企画に多大なご支援並びにご協力を頂いた津山市の皆様、特に城西地域まちづくり協議会の高須会長、佐々木様、四方様、牧原様ほか皆様、若僧会の皆様、高校生や教員の皆様、津山洋学資料館の皆様、津山市役所の乾学芸員ほか皆様、並びに津山商工会議所の皆様に御礼を申し上げたい。